2012年12月19日　教育プログラム②　奈良女子大学
「アジアのナショナリズム」
コーネル大学政治学部名誉教授　ベネディクト・アンダーソン　氏

ナショナリズムには、四つの異なる形態があります。一つ目は、言語や宗教とは関係なく、政治的な独立を求めて台頭したクレオール・ナショナリズム。次にヨーロッパのロマン主義のもとで生まれたナショナリズムで、少数民族が独立を勝ち得ようとするもので、ロシア帝国やオーストリア帝国からの独立運動などの例です。三つ目は、日本のように、大衆からではなく国家の政策として起こされたオフィシャルナショナリズムです。四つ目の反植民地主義に根ざすナショナリズムの形態は、主にヨーロッパの植民地支配に民衆が対抗したことに端を発するナショナリズムです。このように様々な形態のナショナリズムがアジアには存在します。

アジアの中での相違や興味深い点に、国民的英雄に関する事象があります。例えば、フィリピンは、国の独立に貢献した人々が国民的英雄として多数存在し、知名度も全国的に高いのに対し、タイでは、歴史の中で詩人や宗教的な指導者、科学者などの偉人の名前は出てきません。王制や天皇制によるタイや日本では、国の歴史において天皇や王以外の英雄は大きな位置を占めるのは好ましくないという風潮があると私は考えています。

ヨーロッパは完全にひとつの国として統一された歴史がなく、貿易や戦争を繰り返し、国として孤立した歴史があまりありません。各国共通の起源はローマ帝国や古代ギリシアにしか見つかりませんが、アジアには個別の国としてのアイデンティティが明確に存在します。アジアでは、宗教と政治権力との結び付きが密接でしたが、ヨーロッパでは分離していました。ヨーロッパは、制海権を巡り戦争が頻繁におこなわれましたが、アジアでは戦争や貿易に海を積極的に活用してこなかった歴史があり、これらは興味深い点です。

キリスト教は複婚や一夫多妻制を禁止しており、王位継承者の数は少なく、死亡するケースも多かったので王朝滅亡のリスクが高く、実際、純粋な血統が途絶えることもありました。そのため女性も非常に重要となり、ヨーロッパにおいては女王が完璧に受け入れられ、性別に関係なく生き残った子が王位を継ぎました。エリザベス1世をはじめとしてヨーロッパには多くの女王が存在します。アジアでは一夫多妻制をとっていた国が多く、そのため違う母親を持つたくさんの子による後継者争いが激化し、殺し合いになるケースも多く見受けられました。

20世紀になって、アジアではインディラ・ガンディーやコラソン・アキノ、アウン・サン・スー・チーなど政治的指導者として非常に影響力を持つ女性が多く登場します。いずれも強力な政治権力を持つ男性指導者の妻や娘、縁戚者です。ヨーロッパでよく知られた女性政治家は、イギリスのサッチャー首相やドイツのメルケル首相ぐらいで、二人は一般家庭出身で、父親や夫の力は関係なく自力で頂点まで上りつめました。

ヨーロッパに比して、女性指導者がアジアに多く存在し、特異な役割を果たしたことは、ポジティブな面でもネガティブな面でもアジアのナショナリズムを特徴付けていると言えます。

第二次世界大戦後、国土拡大は不可能な時代になり、国連はいかなる形においても領土の拡大は認めません。現在、日中韓の間の海における領土問題がありますが、私は海における領土拡大も不可能だと考えます。

しかし、海底の原油を求めて、アジア各国にイデオロギーとは関係のない資源ナショナリズムが台頭しつつあり、今後ますます拡大する可能性が懸念されます。